



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年12月13日 待降節第三主日B年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 61章 1－2 a、10－11節

第二朗読：テサロニケの第一の手紙 5章 16－24節

福音朗読：ヨハネによる福音書 1章 6－8、19－28節

今日のテーマ：主しゅによる喜びよろこ

三つの朗読から

第一朗読の冒頭のことば「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた」（イザ 61章 1節）は、すでにわたしたちが知っているイエスさまの故郷での第一声を思い出させます。「主の霊がわたしの上におられる」（ルカ 4章 18節）。イエスさまがなされた貧しい人々への救いのわざを思い起こして第一朗読をよんでみたらよいでしょう。その救いのわざに触れた人は「喜び楽しみ」、「喜び躍る」（イザ 61章 10節）ようになるのです。

第二朗読もわたしたちは時折、耳にする箇所です。「いつも喜んでいなさい」（1テサ 5章 16節）という呼びかけは、「必ずそのとおりにしていただきます」（24節）という方が、必ずいらっしゃるといふ確信があるからこそ、応えることができるのです。

福音朗読の「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」という洗礼者ヨハネのことばは、イエスさまを知っているふりをしているわたしたちへの痛烈な皮肉のようにも聞こえてきます。わたしたちはまだ、イエスさまを知らないのです。知らないからこそ洗礼者ヨハネの証しに耳を傾けなければならないのです。

説教

第三イザヤと呼ばれているのは『イザヤ書』56－66章の部分です。第三イザヤの生きた時代は、神さまへの信仰が弱くなっていった時代です。捕囚から帰還して神殿は再建されたにも関わらず、神の栄光は約束されながらも、それがさっぱりと見えない。人々は神さまの願いの実現より、自分の願望の実現を優先しだします。競争社会が生まれ、勝者と敗者に区分されます。「貧しい人」、「打ち碎かれた心」（1節）の人々が登場します。そういった人々に第三イザヤは「良い知らせを伝えさせる」（1節）ために神さまから遣わされたのです。10節以降は救われた人々、喜びを取り返した人々の様子が描かれますが、「主によって」、「主は」（10節）、「主なる神が」（11節）と、主語が「主なる」神さまである

点に注目したいです。救いと喜びは神さまから来るのです。

『ヨハネによる福音書』は、洗礼者ヨハネのことばとしてイザヤ書 40 章を引用し、洗礼者ヨハネは「荒野で叫ぶ者の声」、イエスさまを「証する」(7 節参照) 使命を持った者であるとします。イエスさまは父である神さまのことを「証し」するために来られました。洗礼者ヨハネは、イエスさまの父なる神についての証しの正しさを証しする証人なのです。

証しというのは「ある事柄の真实性を確認し断言すること」(雨宮師による) ですので、ある事柄、ある事実が必要です。結婚という契約の証人は神さまでした(マラ 2 章 14 節)、律法が刻まれた板は神と人間の関係の証し、つまり「契約の証し」となります(出 25 章 16 節 フランシスコ会訳)。また、証しはモノだけではありませんでした。「お前たちと…わたしが選んだわたしの僕がわたしの証人である」(イザ 43 章 10 - 12 節参照 同) と人間も神さまのわざの証しとなります。

証しは、次第に信仰の証しの意味あいを持つようになっていきました。イエスさまは「わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない」(ヨハ 3 章 11 節 新共同訳) とありますから、イエスさまは御父のもとで見聞きしたことを証しするのです。そのイエスさまと御父とでなされた証しの正しさを証明する(証しする) のが洗礼者ヨハネです(ヨハ 1 章 6 - 8 節)。イエスさまは御父について、ご自分の生涯をかけて証しました。この証しは福音として全世界に宣べ伝えられていきます(マタ 24 章 14)。しかしイエスさまによる証しは、人々によって拒絶されました。同じように、宣べ伝える人々も拒絶され、迫害されていきます。こうしてギリシア語で証しということばは、殉教を意味するようになっていったのです。

洗礼者ヨハネは後に、「わたしはこの方を知らなかった」(ヨハ 1 章 33 節) と告白します。ですので、洗礼者ヨハネの証しはまだ見ぬ方についての証しです。経験に基づく証しではないのです。証しは、通常、その人のことばや振る舞いや生き方でなされます。しかし、洗礼者ヨハネの証しは、イエスさまをお遣わしになった方から教えられたことがらでなされるのです。

ひとこと

各朗読の三つのみことばに注意しましょう。

第一朗読：「わたしは主によって喜び楽しみ」(10 節)

主なる神さまのおかげで喜びが来ます。新約の時代を生きるわたしたちにとって、「主」とはイエスさまご自身を指します。イエスさまのおかげで、イエスさまを通じて喜びと楽しみが生じるのです。

第二朗読：「非のうちどころのないものとしてくださいますように」(23 節)

欠点だらけ、罪だらけのわたしたちですが、いつか、神さまによって非のうちどころのないものとさせていただけるのです。そこに希望があります。

福音朗読：「なぜ、洗礼を授けるのですか」(25 節)

洗礼者ヨハネが授ける洗礼は、悔い改めの洗礼です。しかし、イエスさまを起源として始まる洗礼は、神のいのちへと組み入れられる洗礼です。